

—「島原大變肥後迷惑」の記録と記憶—

東日本大震災や熊本地震など、日本は災害の多い国とされています。古来より多くの災害が発生し甚大な被害をもたらしてきました。人々はその記憶を伝えるため、多くの記録を残してきました。

本企画展では、寛政4(1792)年に起きた「島原大變肥後迷惑」を通してその営みを紹介します。

ごあいさつ

雲仙岳では寛政3（1791）年から地震が頻発、住民が不安を抱えるなか、寛政4（1792）年1月18日には噴煙があがった。この噴火によって、溶岩が周辺地域に流れ、その後も、有感地震はおさまる兆しがなかった。こうして、4月1日夜、島原地方を大規模地震（マグニチュード6.4）が襲う。これにより、雲仙岳の東側にある眉山の山体崩落が起り、土石流が有明海に流れ込んだ。

すると、大津波が発生し、天草や熊本、宇土、玉名、荒尾などにも被害をもたらした。これにより、約15,000人も死者や多くの負傷者を出し、家屋・蔵が流失、牛馬も流死した。島原半島にとどまらず、対岸の熊本にも被害を及ぼしたことから、この一連の被災は「島原大變肥後迷惑」と言われた。未曾有の被害をもたらした災害を後世に伝えるため、数多くの記録物が作成され、被災地には、流死者を悼んだ供養塔も建立された。この供養塔は、島原藩が命じたもの、村の有志によるもの、僧侶が建立したものなどが現存している。

雲仙普賢岳は平成2（1990）年11月17日に噴火したことを機に、翌年5月15日には水無川で土石流が発生し、6月3日の大規模火砕流では、43名の死者・行方不明者があった。また、平成28（2016）年4月14日、同月16日に発生した熊本地震は、我々の記憶に新しい。島原・天草・熊本では、近年、幸いにも津波被害は出ていないが、かつての災害の史実を認識しておくことは、防災意識を醸成するうえでも肝要である。

本企画展は、船の科学館・日本財団の海の学び調査・研究サポート「長崎・熊本両県における自然災害（地震・噴火・津波）に関する総合調査—寛政4年「島原大變肥後迷惑」の文献・慰霊碑を中心に—」（研究代表：安高啓明）の助成をうけて実施することができた。調査研究分担者の松本博幸（天草市）・吉田信也（島原市）には多大なご協力を得た。また、日本史研究室に所属し、将来、学芸員への就業を希望する大学院生・学部生も、調査から展示に至るまで参加し、実践教育の機会として本事業を実施することができた。本事業にご協力いただいた関係各位に衷心よりお礼申し上げます。

平成30年5月29日

熊本大学大学院人文社会科学研究所

准教授 安高啓明



I 書物に見る災害の記録

ここでは文字として残された災害の記録を紹介します。寛政4年、普賢岳噴火に伴う眉山の山体崩壊により大津波が発生しました。被害は対岸の熊本にも及び、甚大な被害をもたらしました。その様子を人々は書き記し後世へ伝えていきます。

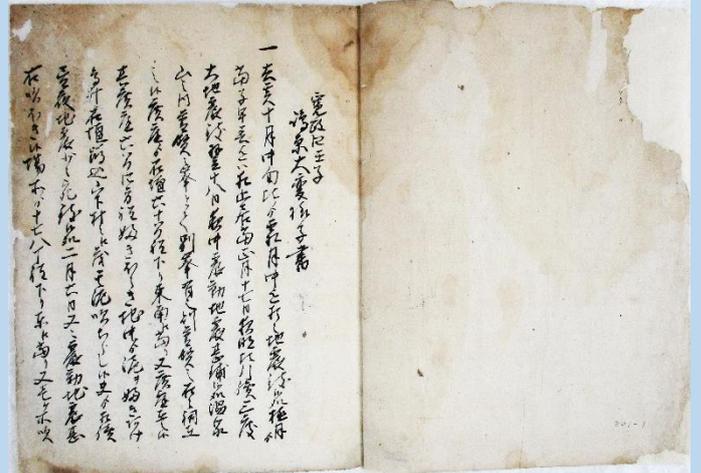


『肥前島原大變様子書』

著者：銅野源助 年代：江戸時代後期

所蔵：肥前島原松平文庫

高田(現豊後高田市)大庄屋の銅野源助が災害後の島原を訪れ記録したものです。島原大變のおよそ6ヶ月前から続く地震の記述から始まります。避難する殿様や犠牲になった人々、現地で見聞きしたありのままの様子を記しています。

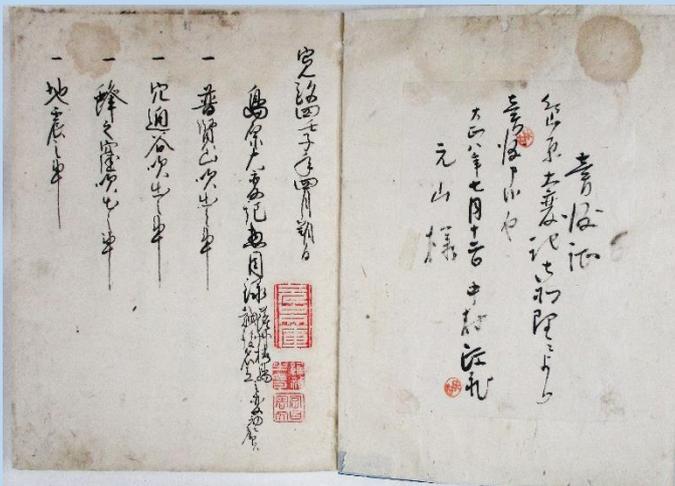


『島原大變記』

著者：不明 年代：江戸時代後期～明治

所蔵：肥前島原松平文庫

島原大變肥後迷惑の後に作成された、上中下からなる三冊本です。雲仙岳の噴火から、山体崩壊後の島原と熊本の被害状況などがまとめられています。このほかにも、桜島の噴火や松前(北海道)での津波など他の地域の災害も紹介されています。



Ⅱ つなぐ記憶と供養塔

災害後、土砂崩れや大津波などで亡くなった人々は島原藩や地域の人々によって供養されました。島原半島や熊本県の被害を受けた地域には、多くの供養塔が残されています。現在でも犠牲者の冥福が祈り続けられています。ここではその中から2基を紹介します。

「流死菩提供養塔」

建立：島原藩 年代：寛政5(1793)年

島原大變の翌年2月28日、溺死体が多く打ち上げられた地に藩の命令で建てられました。7つの同形・同碑文の供養塔が現存しており、島原半島の東側の海沿いに点在します。この供養塔は島原市南崩山町にあり、島原市の指定有形文化財です。



流死菩提供養塔碑文

前面

流死菩提供養塔

左側面

寛政四年壬午四月朔日
高波

法量

高さ：180cm
横幅：59.5cm
奥行：42cm

「溺死無縁塔」

建立：上之原順礼中 年代：寛政12(1800)年頃か

江東寺近くの道路沿いに現存する供養塔です。上之原順礼中という地域の信仰集団が、無縁仏のためにお金を出し合い建てたとされています。昭和60(1985年)の工事の際に、ここから多数の白骨や歯が出土しました。

溺死無縁塔碑文

右側面

上之原
順礼中

前面

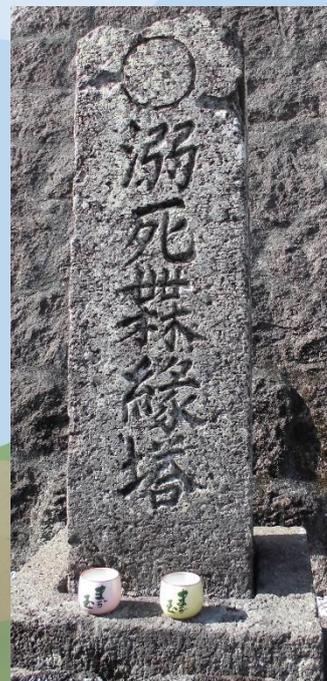
○溺死無縁塔

左側面

寛政四年壬午
四月朔日

法量

高さ：113cm
横幅：33cm
奥行：28.5cm



注目!

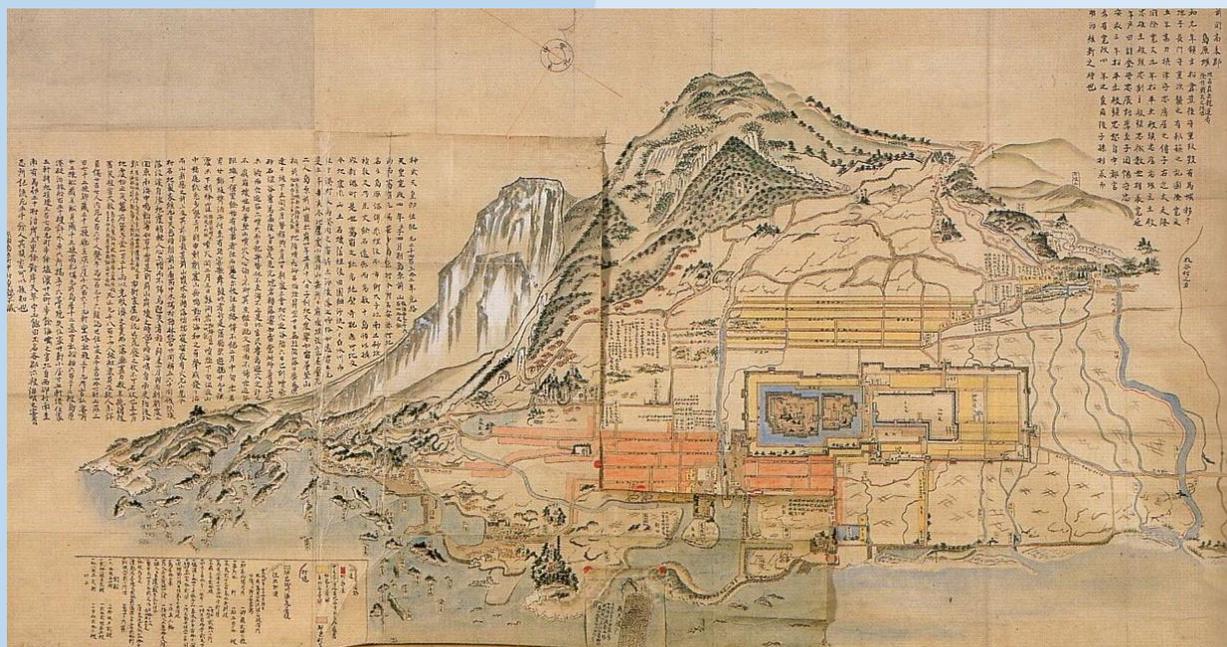
「島原大変前後図」

年代：明治 23(1890)年 所蔵：肥前島原松平文庫

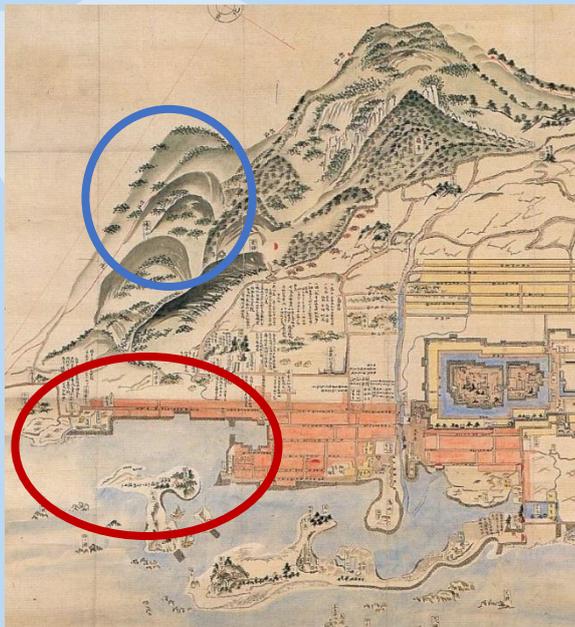
明治 23 年に原図を写して、金井俊行(南高来郡長)の文章が書き加えられたものです。大変前の図に大変後の図を重ねることで、被災と復興の様子がわかります。原図は所在不明であるため、貴重な絵図です。



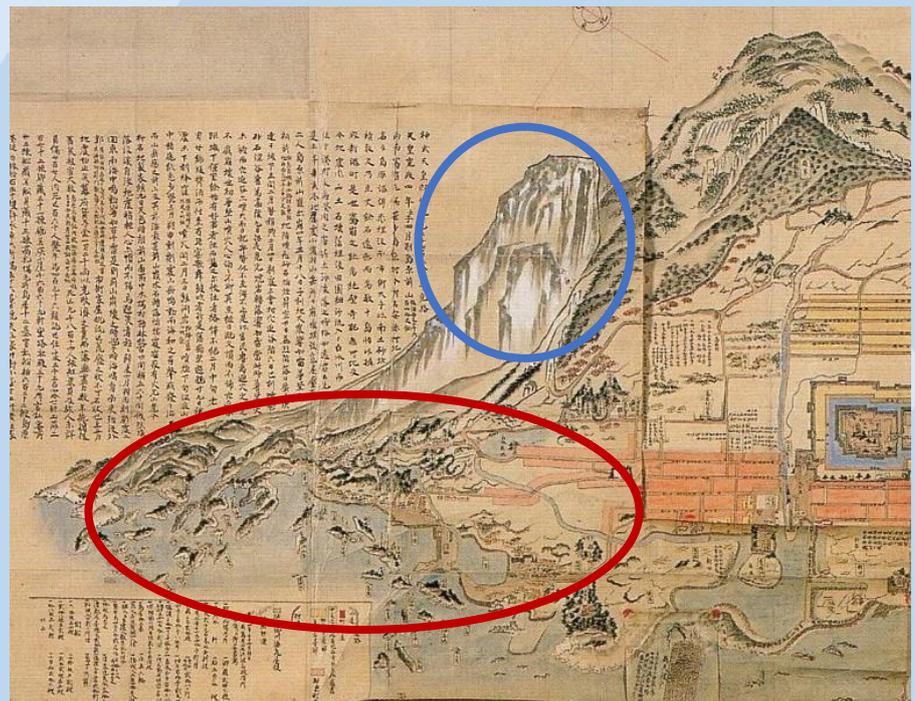
眉山崩壊前の図



眉山崩壊後の図



眉山崩壊前後の城下町の被害がわかります。土砂が海になだれ込み、多くの小島「九十九島」ができました。この崩壊により陸地が1km広がったと言われています。



船の科学館平成 29 年度 PROGRAM 3 「海の学び調査・研究サポート」採択事業
 長崎・熊本両県における自然災害（地震・噴火・津波）に関する総合調査
 一寛政4年「島原大変肥後迷惑」の文献・慰霊碑を中心に—

研究代表：安高 啓明（熊本大学大学院准教授）
 作成：久保 春香・長屋 佳歩（熊本大学大学院）
 川端 駆（熊本大学）

海の学び
 ミュージアム
 サポート

Supported by
 日本財団
 THE NIPPON
 FOUNDATION